

「真の地方の時代」に挑む志士とともに

牧村 範康

はじめに

過日、政治塾 2 期生としての最初の講義に参加し、第一部渡辺猛之参議院議員及び第二部阿部・金子先生の中身の濃い講義を拝聴させていただいた。第一部冒頭、渡辺議員より、「私の講義はレポートには適さないの、皆さんの政治に対する思いを提出して欲しい」とのことであった。それを踏まえて、本稿では、初講義から感じたことを、まず、1、「政治家としての心得」を渡辺議員の講義を手がかりに論じる。つづいて、2、「スピーチ力の重要性」を名演説の解説を手がかりに論じ、最後に、3、「今回の感想」で結びたい。

1. 政治家としての心得

皆さんが考える政治家の心得とは何か？心得を3つ答えなさい。この問に対して私は、「強さ」、「優しさ」、「謙虚さ」の3つをあげた。いささか抽象的ではあったが、「強さ」とは、当然フィジカルなものではない。どのような状況下でも、自らの政治信条を貫く強い意志である。とりわけ、身近な地方議員においては、市民の幸福のために、常に貪欲に学び、日頃から直接的に住民の話聞き、自らの選択に対しては理性とともに論理的に説明する能力を高めることが重要になる。優しい心を持ち、謙虚なだけでは政治家としては不資格であろう。ここで言うそれらは「強さ」を補完する意味での優しさであり謙虚さなのである。それらに支えられ、逆境においても折れない信念、高い理想と情熱が生まれ、メンタルの強さが維持できるのだと考えるからである。

また、渡辺議員が説かれた「志」「演説力」「人間性」という3つの心得は、今とこれまでの先生の政治活動を投影している心得として、改めてその実践に対し敬意を払うと同時に、心から納得のいくものであった。私自身も客観的に自らの心得を生き方に反映できるよう努力せねばならないと痛感した。私は、福沢諭吉先生の「心訓七条」*を生き方のベースにしているが、改めて読み返すと、政治家という職業の心得にも相通じるものではないかと考える。

一方、政治に対する思いであるが、2000年以降、いわゆる「世代間格差」が社会問題化してきた。民衆が大衆化し政治から離れ、民主主義を腐敗させてきたツケ、低成長のツケ、

制度疲労のツケを若者世代が払わされている側面は確かに事実である。確かに、世代の便益はトレードオフではあるものの、高齢世代と若者世代の双方が便益を享受できるような社会の実現に向けて、エリートの支配と格差を最小化し、民主的なプロセスを経て、理性（正当性・妥当性・公共善）とともにネクストデモクラシーに挑まなければいけない。

現在、新自由主義（ネオリベラリズム）の失敗を愛国教育で上書きしようとしているとの批判が左派から沸き上がってきている。しかし、私は正しい歴史認識の上に日本人のアイデンティティを喚起し、自主憲法の制定の上に国際社会の土俵に上がらなければならないと考える。もちろん、国家の主体は国民であり、また地域の主体は住民である。

貧しさからの解放が課題であった時代では、エリートによる経済的価値の実現に国民的合意を取り付けることができた。ところが、社会が豊かになり、欲求が心理的なものになると、それは多様化してくる。したがって、単一の価値を中心として大衆を統合することは難しくなる。欲求の充足が人間にとっての価値である以上、欲求が多様化すれば価値の多元的になる。この多元性を許容しながら社会的統合を確保していくために、共通のアイデンティティの喚起が必要なのである。日本が、日本国民が「強さ」、「優しさ」、「謙虚さ」を身に付け、大多数の大衆を権利と義務の上にあるシティズンへと養成していくことが急務なのだ。平たく言えば、特に教育が重要であるというのが政治に対する今の思いである。なぜなら、国民のレベル以上の政治家は生まれないからである。

2、スピーチ(演説)力の重要性

まず、残念ながら私はスピーチが上手いとはいえない。講義の中で紹介された名演説は選挙に勝つためのテクニックではあるが、選挙に必ず勝つことが政治家としての第一歩である以上、そのテクニックを身につけなければ何も始まらない。有権者の教養レベルが向上している現在、地方議会であってもドブ板選挙で勝てるのは、おそらく最初だけであろう。つまり、政治家を志す以上、下手では済まされないのである。

スピーチは「最初の3分でイメージが決まる」といわれる。その僅かな時間の中で、抑揚、身振り、キーワードの繰り返しで聴衆を巻き込むパフォーマンスを演出しなければいけない。では、どうしたら、名演説が可能になるのであろうか。「習うより、慣れろ！」とよく言われるが、私も演説はこれに尽きると考える。そして、そこに語り手の哲学（魂）が加わったとき、名演説になるのではないかと思うのである。

議会では、年4回の一般質問の機会がある。質問前には、服装を整え、鏡に向かい、何度も何度も繰り返し練習する。時には、家族をも巻き込み行うこともあるが、実際に満足のいくパフォーマンスを演じきれることは少ない。それでも50分という質問時間の中で、私が注意を払っているのは、最初（おそらく時間にして3分程度）の前置きである。5年前の初当選以来、毎回登壇しているが、この前置きがその後の質問の良し悪しに影響してくることは、傍聴者の感想からも明らかである。

未だに「慣れる」までには至っていないが、今後も多くのテクニックを吸収し、魂を込

めて、聴衆を巻き込めるスピーチが出来るよう日頃からアンテナを張り、語彙を深めつつ演説力の向上に努めなければならないと再認識させていただけた。

3, 終わりに

第一部、第二部、懇親会を通して、県連関係者、塾生の並々ならぬ情熱が伝わってきた。岐阜から「国」が変わるかもしれない！そんな期待感が私に生まれたのは事実である。政治家は、ゆずれない、ぶれない軸を持ちつつも、常に民主主義のフロンティアを探求し続けなければならない。ぎふ政治塾は住民不在の経済至上主義、住民不在の新自由主義を改め、「真の地方の時代」のデモクラシーに挑戦するのだ。

バブルが崩壊して 20 余年、国も地方も財政難、政府は「社会保障と税の一体改革」により、超高齢社会、人口減少社会においても持続可能な国家を目指そうとしているが、国民は冷ややかに見つめる。選挙の常套手段であった「地方の時代」というフレーズに実体を持たず時、地方の気概を示す時が来たのではないだろうか。中央に対し地方が確固たるその立ち位置を示し実践していくことは、持続可能な社会を実現する基礎・基本となるのであろう。そして、地方政府の充実発展のために欠くことのできない一つのポイントが、その地方政府に参画する地方政治家の資質の向上である。利権やしがらみに翻弄され、対案なき批判に終始することなく、郷土を愛し、郷土のために命を賭けて尽力する地方議員こそが、閉塞感に覆われている我が国を救う原動力となるのである。

甚だ浅学非才ながら、ぎふ政治塾その 2 期塾生として、想いを同じくする志士と「真の地方の時代」というベクトルに挑むことができることの喜びを抑え切れない。

注釈)

* 「心訓七条」 福沢諭吉

- 一、世の中で一番楽しく立派なことは一生涯を貫く仕事を持つことです
- 一、世の中で一番惨めなことは人間として教養がないことです
- 一、世の中で一番さびしいことはする仕事のないことです
- 一、世の中で一番醜いことは他人の生活を羨むことです
- 一、世の中で一番尊いことは人の為に奉仕して決して恩にきせないことです
- 一、世の中で一番美しいことは全てのものに愛情を持つことです
- 一、世の中で一番悲しいことは嘘をつくことです